

No. 03

キャンパスカフェ なごみ

生涯福祉学部 社会福祉学科 小倉 毅 深教授

石井杏実（3年）石田祐生芽（3年）西田優花（3年）佐藤苗美（3年）
長田知花（2年）前田夢華（1年）山下瑠菜（1年）

看護学部 看護学科 東 久子 講師
井本 瑞紀（4年）松浦大和（2年）

目的

「キャンパスカフェなごみ」は地域の人々に対し、支える人も支えが必要な人もその人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で、自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目的としています。

「なごみ」は、地域密着、地域開放を志向する本学の機能を活用し、ボランティア学生の学びへの効果と認知症総合アセスメント(DASC)によるカフェの効果測定を目的に、H28年度より開始したプログラムです。当初は認知症の方とその家族を対象に始めましたが、この地域も高齢化や単身世帯の増加は進んでおり、支えのいる人は認知症に限らないことに気づきました。住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けて行くためには、時に支えられ時に支えることもあるご近所同士「お互いさま」の精神がキーになってくるのではないかと考えました。

のために気軽に語りあう場を提供し、顔見知りの関係を作り、気軽に声を掛け合える地域の「ご近所さん」を増やしたりとおおむね2か月に1度キャンパス内で実施しています。その時々のコーヒーのおいしさや講座の感想をコーヒーアロマを楽しみながらラックスして学生とともに語り合い豊かな時間を過ごしています。

カフェに向けての準備

大学が所在する加古川市平岡町も、時代の流れに逆らえず高齢化率は上昇し、人口は減り、介護を必要とする住民が増加しています。このまま状況が進行すると どのような問題が起きるでしょうか。

- ・みんなばらばらの一人ボッチ世帯が増え、人とかかわる時間が減る

- ・住民が減少することで、お店が減るなど、不便な生活となる

- ・認知症者や介護を必要とする人が増えても 支え手がなくなる

「危機」は「危険」でもあるけれど「チャンス」もある！ と私たちは考え、

「コミュニケーションのあるコミュニティをつくる」ことへ向かって行動を起

こしました。この大学という場を利用できないか、学生ができることはないか、と考え、認知症だけに限わらず、地域住民のための「コミュニティカフェ」の運用を検討しました。

地域住民の方に来ていただき、本格的な焙煎コーヒーを作りたい、大学には地域支援専門の先生方がいる、そういった先生方の知恵を地域に提供してもらおう、と考えました。この基本方針のもと、町内会の役員の方々、社会福祉協議会、民生委員の方々にもご相談し、ご協力を仰ぎながら準備を進めました。兵庫大学の連携協定先であるいなみの学園の陶芸科に協力を求め、コーヒーカップを手作りしました。そして生豆を焙煎から行い、粉碎、抽出までの過程を楽しめるカフェを考えました。



2～3か月に1回の開催で会を重ねるごとに、内容にも変化が出てきました。大学の人財を活かし、健康システム学科からはチューブ体操、栄養マネジメント学科からは野菜たっぷりレシピの紹介、保育科からは歌と歌唱指導、外部講師による念珠作成などのミニ講座と、参加者自らがコーヒーの生豆を焙煎し、挽きたてを飲んでいただく2部構成で進めています。



定期的なカフェの開催

（参加の動機；回答者数21名、上位3つ複数回答）

| | |
|--------------|-------|
| 友人・知人に誘われた | (20名) |
| 大学生とふれあえるから | (18名) |
| コーヒーが好きだから | (18名) |
| 人と話せるから | (12名) |
| 外出のきっかけになるから | (9名) |
| 大学に協力したいから | (5名) |
| 面白そうだった | (8名) |
| 無料だから | (2名) |
| 暇だから | (0名) |

社会関係
(ふれあう機会)

社会参加・自己実現
(成長への挑戦)

「コーヒーが好きだから」

ふりかえり～教育の成果と学生の成長～

この活動を通して、主体性・創造性・実効性・課題発見力・傾聴力といった専門職の力量を高めることができました。

1. コミュニケーションスキルの向上:

本学の学生は、多くの学生が対人援助職に就きます。初対面時より、高齢者と良好な関係を作るためには、コミュニケーションのスキルが必要とされます。カフェでは、学生はお迎え、ミニ講義・コーヒー焙煎の補助、カップやお茶菓子の配布等の主催者側の動きの後、参加者と同じテーブルにつき、参加者と共に談笑して時間を共有します。各回の感想や今後の要望についても聴取する体験を通して、コミュニケーションスキルの向上が見込まれます。

2. 高齢者的心身能力特性・心理傾向が理解でき自然体で配慮ある行動がとれる:

学生が実習以外で高齢者と接し、生の声を聞く機会は多くはありません。参加者との会話から考え方を学んだり、移動や綿密な動作などを観察することで、動きにくさをどのように補い生活しているかといった情報を得ることができます。これらからリスクを発見し予防的支援を考え、思いやりのある態度で行動していくことが期待できます。

3. 地域の諸問題への関心が高まる:

参加者の会話から、地域の、または家庭の具体的な困りごとを直接聞くことができたり、地域の要支援者の発見につなげることができます。参加者の何気ない一言が問題解決の発端となり、住民間での動きに変化が起きたり、多職種につながっていく実感をカフェ内の会話や、参加教員による経緯説明により持つことができます。これは大きな自己効力感につながると考えられ、PBLの目的である課題発見のモチベーションに寄与することができます。

